

# ヒルファディングと研究

倉 田 稔

## も く じ

はじめに

1

1. ゴットシャルヒ
2. 『金融資本論の成立』『若きヒルファディング』
3. 日本の研究書
4. 最近の海外の代表的研究
5. その他
6. ヒルファディングの著作の日本語訳

2

7. ヒルファディングの少年時代
8. ドイツで
9. 再びベルリンで
10. ナチズムとの関連で  
ドイツの年誌 ヒルファディングの見解 彼の死後の事態
11. 結論的評注

## はじめに

前半をルードルフ・ヒルファディングの諸研究について、後半を彼について、少し語る。

## 1

## 1. ゴットシャルヒ

戦後あるいは現在のヒルファディング研究を、世界で、従って日本でも、高い水準に上げた初めは、ゴットシャルヒの研究である。Wilfried Gottschalch, *Strukturveränderungen der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*, Berlin 1962. (邦訳『ヒルファディング』ミネルヴァ書房)。私の古い書評を掲げる<sup>1)</sup>。

ゴットシャルヒ『ヒルファディング』(ミネルヴァ書房 1973年)

全生涯にわたる学説の検討

理論的創作活動が三段階に区分され

本書は、1962年に西ベルリンで出版されたゴットシャルヒのドクトル論文『ルードルフ・ヒルファディングの学説における社会と政治行動の構造変化』の邦訳である。原書刊行後、日本では今野登氏の書評が出た。本書の意義・内容については、「訳者あとがき」に詳しく、適切である。

著者は、マルクス、エンゲルスの基本的見解をよくふまえ、かつヒルファディングを教条的な立場からではなくとり上げている。この点で氏は成功したと言える。

著者は、ヒルファディングの全生涯にわたって彼の学説を検討している。シュタインのごく短い伝記<sup>2)</sup>を除けば、ヒルファディングの全生涯にわたり検討したものはないので、この点で、ゴットシャルヒの『ヒルファディング』は世界初めての包括的・本格的研究といってよい。事実、ヨーロッパでは、ヒルファ

---

(1) 初め私は、『日本読書新聞』1973(昭和48)年11月12日(月)、1732号で書評し、その後、加筆し、『社会経済思想史文献(2)』(杉山書店)に入れたが、売り切れたので、再録する。

(2) シュタイン『ヒルファディング伝』成文社。

ディングの研究といえば、「ゴットシャルヒが書きましたね」と言っているのである。

氏は、ヒルファディングを三つの時期に区分し、第一次世界戦争まで（二・三章）、ワイマール共和国（四・五章）、亡命（六・七章）としている。この第一期から第二期へ、第二期から第三期へ移行すると、ヒルファディングの思想と行動が構造変化する。本書のテーマはそれを示している。

ヒルファディングの理論的創作活動は、三段階に分けられる。第一段階は「金融資本」の分析であって、それを資本主義の最終局面と見た。第二段階は「組織資本主義」の研究であって、資本主義の構造改革が主張され、社会主義は民主的議会主義に基づいて達成できると期待した<sup>3)</sup>。第三段階では、ナチズムの支配の下でつきつけられた「国家の執行権のもとへの経済の服従」の問題を取り扱った。すなわち、政治が経済を規定することであり、著者はそれを、マルクス主義歴史観の修正と呼んでいる。この時期の叙述は興味深いものであって、著者も力を入れているようである。

日本でのヒルファディング研究は、ほとんど第一期に限られ、とくに『金融資本論』をめぐる、そして少い例外を除けば、『金融資本論』の余り重要でない側面の研究に集中している。この意味で本書は、未開拓の分野に研究の光を投げ掛けたのである。

さて、本書の弱点をいくつか示せば、まず、資料上の制約である。第一に、当時の非合法資料、すなわち亡命ドイツ社会民主党機関紙が全く利用されていない。第二に、国際的未発表資料が利用されていない。筆者のベルリンでの調べから得る印象によると、本書はほとんど西ベルリンの資料を中心にしていられる。伝記的事実には、少なくない誤りが散見される。『金融資本論』などのヒルファディングの諸学説が運動史上に占める位置・意義について、結論が明白でないことがある。

本書のすぐれた点は、前述の点に加えて、ドイツ労働運動史、すなわち社会

---

(3) この期待は、第二期にもあった。

民主党史にたいする把握が正確であること、社会史的・思想史的背景の叙述が、とくに第二期ですぐれ、浩瀚な既発表研究文献をよく利用していること、独創的な理論家としてのヒルファディング像を実証的に提出しようとしていること、であろう。

ヒルファディングは、1941年に死亡したので、歴史的に位置を確定するのは、初期・中期を除けば、そう容易ではなかった。それゆえに、初めての本格的全体像が、死後20年を経てようやく今提出されたといつてよい。

その意味で、本書は、今後の研究の一里塚となる。ヒルファディングの研究者は、第二期・第三期の研究が非常に手薄で遅れていたことを痛感するであろう。

また第三期について言えば、本書もほとんど研究していないナチズムとスターリニズムの諸問題と、ヒルファディングの思想・学説の関係などは、今後の研究としてはほとんど未開拓の分野であるし、現代史の問題点から言えば当然解明されるべきものであろう。

追記) ゴットシャルヒ教授は、1986年来日した。当時アムステルダム大学教授である。ゴ教授と私は、私の研究室で、この書評を見ながら話し合った。例えば、文中で、国際的未発表資料が利用されていない、の所で、「これは何を意味するか」と教授は質問した。「例えば、アムステルダム社会史国際研究所の資料など」と私が答えると、教授いわく、「あの時、お金がなかった」。

ゴットシャルヒ教授に、「なぜヒルファディングを研究テーマに選んだのですか」と聞くと、「ヒルファディングが主著『金融資本論』一冊だと思ったからです、ところがやってみたら、とんでもない、大変だった。」

2. 『金融資本論の成立』 『若きヒルファディング』

1975年に私も、『金融資本論の成立』（青木書店）を出した。これについて、保住敏彦氏の書評が、『商学討究』26巻3号、1975年12月に出た。私も「『金融資本論の成立』補遺」（『人文研究』51輯 1976年3月）を書いた。戸原四郎氏も書評している。

拙書『金融資本論の成立』での、ヒルファディングの手紙引用での誤記・誤植。

ページ,	行	誤	正
42,	18	dieses	diese
43,	7	Herumbasseln	Herumbasteln
43,	9	Aufschlusse	Aufschlüsse
43,	14	stärendes	störendes
45,	21	ökonomische	ökonomischen
45,	22-23	Entwicklungzusammenhängt	Entwicklung zusammenhängt
46,	3	Ausbeute	Ausbeuten
46,	4	englisch	englische
46,	5	somit	soweit
46,	17	fest	feste
47,	2	liebst	liebsten
47,	2	halbweg	halbwegs
47,	3	blos	klar
47,	13	des Darstellung	der Darstellung
47,	14	gr. widmet	gewidmet
47,	18	der	den
	18	warum	worum
47,	19	polemische	polemischen

48,	2	ihres	ihrer
48,	3	festgengelt	festgenagelt
48,	5	Nachweichses	Nachwuchses
49,	18	bekommt	bekannt
49,	19	er einem	an einem
106,	20	Endebin	Ende bin

『金融資本論の成立』の執筆と前後して、ヒルファディングの前半生の伝記を私は書いた。『若きヒルファディング』（丘書房 1984年）である。書物としての出版は遅くなった。

その後私は、「中央ヨーロッパ論」（『国民国家の統合と分裂』北樹出版）を書いた。これを『若きヒルファディング』の中に入れる必要がある。

その後、黒滝正昭氏の書評が出た。「倉田 稔『若きヒルファディング』（『商学討究』36(1), 1985年7月, p.103-117)である。なおそれに続いて、私も『若きヒルファディング』補遺」（『商学討究』42巻4号, 1992年）を書いた。拙書は、この書評と補遺を参考にしないと駄目である。

拙書の欠陥は、1. 「カフェ・ツェントラール」がなくなったとした私の誤り（安井）、2. 生まれがシュタインの商人説に対して、私が否定したが、部分的に正しかった。3. 2つの学生社会主義同盟を混じって説明し（黒滝前掲）たこと、である。

### 3. 日本の研究書

#### 中田常男『金融資本論』研究

『金融資本論』そのものについては、中田常男の2冊の大著が出た。『擬制資本論の理論的展開——ヒルファディング『金融資本論』研究①』、『金融資本と独占の理論——ヒルファディング『金融資本論』研究②』（未来社）がでた。『金融資本論』の本文以上に、分量があるほどの研究であり、第3編までの研究は、本書を参考にしないと、もう話にならないであろう。だが、本書

は、ヒルファディング『金融資本論』が絶対に正しいという立場で書かれている。だが事はそう簡単なことでもなく、ヒルファディング理論がすべてただし  
いわけでもない。

### 上条勇『ヒルファディングと現代資本主義』

上条勇『ヒルファディングと現代資本主義』(粹出版)は、立派なものである。  
中期ヒルファディングの思想と行動の研究が、ほぼこれでできあがった。

### 黒滝正昭『ルードルフ・ヒルファデーディングの理論的遺産』

黒滝正昭『ルードルフ・ヒルファデーディングの理論的遺産』(近代文芸社  
1995年)が出た。第2刷(1998年)が新しい。これはヒルファディング研究の  
重要な点のいくつかがしっかり研究されている。私も書評しているので、くり  
返さない。その批評の類は下記の通り。

書評 倉田 稔「黒滝正昭教授の新しいヒルファディング研究」(東北大学  
『研究年報 経済学』第57巻第2号。通巻第200号)。

黒滝正昭「ヒルファデーディングの遺書『歴史的問題』及びノートの意  
義について」(東北大『研究年報 経済学』第57巻第3号)

書評 金田・柴田・田中「黒滝正昭著『ルードルフ・ヒルファデーディングの  
理論的遺産』」(東北大『研究年報 経済学』第57巻第3号)

書評 倉田 稔「黒滝正昭『ルードルフ・ヒルファデーディングの理論的遺  
産』」(『社会思想史研究』20号 社会思想史学会 1996年  
9月)。

### 河野裕康『ヒルファディング経済政策思想』

河野裕康『ヒルファディング経済政策思想』(法政大学出版)が出て、新発  
見のヒルファディングの初期連続論文が紹介された。したがって、それを見る  
必要がある。これには、私は書評を書いたので、繰り返さない。書評「河野裕

康『ヒルファディング 経済政策思想』(『歴史学研究』657号。1994・4月)。

#### 4. 最近の海外の代表的研究

スマルダン William Smaldone は, *Rudolf Hilferding. The Tragedy of a German Social Democrat.* (Northern Illinois University Press 1998) を出版した。氏の名の発音はわからないが, スマルダンと表現する。これは翻訳に値する。

他に F. Peter Wagner, *Rudolf Hilferding.* Humanity Press New Jersey 1996.

Volker Wellhoener, *Grossbanken und Grossindustrie im Kaiserreich.* Vandenhoeck & Ruprecht. Goettingen 1989. 本書は前半がヒルファディングの理論と現実の関係の研究で, 後半が実態研究である。

*Vademecum zu einem Klassiker. Der Beziehungen zwischen Industrie und Finanzkapital.* hrsg. Bertram Schefold. Kommentarband zum Faksimile-Nachdruck der 1910 erschienenen Erstausgabe von Rudolf Hilferding *Das Finanzkapital.* Verlag Wirtschaft und Finanzen Duesserdorf 2000. つまり新版復刻初版『金融資本論』に付随された書物。Schefold, Streissler, Schmidt, Neil, の4氏の論文の入った書, である。

以上4点がある。

#### 5. その他

ヒルファディングの後期の研究が, 現在では不十分である。そのために, 小生も以下のものを書き, また資料のために, 『ヒルファディング ナチス経済構造分析』(新評論)を出した。また論文として,

「ルードルフ・ヒルファディングの経済理論と思想の転換——『金融資本論』



から「ドイツ経済批判」・「歴史的問題」へ——」 in: 『東京経大会誌——経済学』207号, 1998年。

私の研究では, 論文「USPD とヒルファディング外伝, 主に1918年まで」(『商学討究』48の1, 1998年8月)

ノート「ヒルファディングについての2点」(『商学討究』44の3, 1994年1月)がある。

なお, 個別研究ではないが, ハワードとキング『マルクス経済学の歴史』上, (ナカニシヤ出版 1997年)の第1部第5章で, 『金融資本論』が扱われている。

ヒルファディングのビブリオグラフィーについては, 私の Hilferding. Schriften und Briefe (Bibliographie). in: *Internationale Wissenschaftliche Korrespondenz*. 1974 Sep. ただし, 追加と過ちをいつか書くつもりである。

ヒルファディングのドイツ語著作集は,  
Cola Stephan (Hg.), *Zwischen den Stühlen oder über die Unvereinbarkeit von Theorie und Praxis. Schriften Rudolf Hilferdings 1904 bis 1940*. Berlin Bonn 1982

## 研究書

その他, 猪俣, 野田, 保住, 安井編書, ピエトラネラ訳書, 飯田編書, シュタイン訳書, などがある。新しく, 河野祐康「賠償問題とヒルファディングの経済政策論」(『一橋大学社会科学古典資料センター』2004年3月)が出た。

## 6. ヒルファディングの著作の日本語訳

『金融資本論』岩波文庫, 大月書店。

『ヒルファディング マルクス経済学研究』法政大学出版。

主に中期(ばかりではなく, 後期も少し入っているが,) ヒルファディングの代表作は, 上条さんと私の編集した『ヒルファディング 現代資本主義論』(新評論)で出ているので, 研究しやすくなったと思う。その他, 文献は本稿で示

してある。

## 2

### 7. ヒルファディングの少年時代

社会科学の巨人である（黒滝）ルードルフ・ヒルファディングは、ウィーン生まれだが、祖父と父の出身は、今のロシア、プロディである。当時、ガリチア、ハプスブルク帝国であった<sup>1)</sup>。

父が商人であったというシュタインの説は、部分的には正しかった。一時、父は商人だった。ただしサラリーマンであったとする方が、より正しい。

この家族は、ユダヤ人であった。ユダヤ人は、イスラエルに3000-2500年前の500年のみ住んでいた。はじめエジプト、その後、主にロシア・東欧に定住した。かれらの一部分は、後に西に移住した。さて、東と西のユダヤ人の違いがある。東のユダヤ人は、ゲットーに住んだ。農民が多かった。東のほんの1部が、西ヨーロッパへ出た。そこでユダヤ人差別があったか、なかったかは、微妙である。概してあったと見るべきである。フロイトの例、ツヴァイクの反対例がある。

ヒルファディングはウィーン2区<sup>2)</sup>に生まれた。だから廻りにはユダヤ人が多かった。彼は生まれながら、ユダヤ教徒であった。彼の家はコンクリートのアパートで、3部屋くらいあり、当時のウィーンの普通なみの家である。現代日本で云う中流である。もちろん廻りには貧民窟のような所もあった。多くの人々は、ヒルファディングの家よりも貧しかった。彼の生活圏はほとんど第2区に限られていた。この当時ウィーンにはリング・シュトラッセがあって、都市中心の造りは現在とほぼ同じであった。

ヒルファディングは小学校では勉強のできない方ではなかった。むしろ優秀

(1) 彼の先祖・血縁について、拙稿「『若きヒルファディング』補遺」。

(2) ウィーン第2区 Heimatmuseum がある。

な生徒だったと思える。なぜなら父が彼をギムナジウムに入れようと思うほどであり、また入ったからである。いくらユダヤ人が教育好きだとしてもギムナジウムに入れるとは限らない。親の社会的上昇心がヒルファディングのコースに作用した。その上、父がサラリーマンであったことも作用した。両親は彼に期待をかけ、十年間の「投資」をしたのである。家庭は経済的に困ってはいなかった。

ヒルファディングが医学部を選んだのは、親の助言・薦めであったろう。大学に入る時のヒルファディングは、本気かどうかは分からないが、まだユダヤ教徒である。

ユダヤ人は優秀か、金持ちかの問題がある。彼らは特に優秀ではない。金持ちではない。西ヨーロッパへ出た者のうち一部が、少し優秀で、少し金持ち、となった。ロスチャイルド家は例外である。かつて彼らには、土地所有を認められず、やむなく質屋をした人々もいた。優秀になった理由は、その立場と、教育とにある。後者とは、母が異郷にあって、アイデンティティを感じられず、子供の教育に熱心になったからである（ジョンストン『ウィーン精神』）。

ユダヤ人はウィーンでは、多くがレオポルトシュタト（=第2区）に住んだ。大学に行った者が多く、その職業選択は、多くが、法律=弁護士と、医学=医者であった。

ユダヤ人自身の定義からすれば、ユダヤ人はユダヤ教徒である。従って、マルクスもヒルファディングもユダヤ人とされるが、彼らは定義でいうユダヤ人ではない。いわばユダヤ民族を裏切った。ヒルファディングは大学に入って *confessionlos*（無宗教）だった。

彼のギムナジウムの成績が、なぜ悪いか。当時の学校と教育制度にあった。そしてヒルファディングは学生社会主義同盟に熱を入れた。ヒルファディングらの読んだ『ノイエ・ツァイト』が、当時は崇拜されていた。

1895年に、カフェ「ツム・ハイリゲン・レオポルト」に集まる学生は、若い大学教師からなる他のグループと、マックス・アドラーが議長をする *Freie Vereinigung Sozialistischer Studenten und Akademiker* として知られる、よ

り大きな組織を作るために、力を合わせた。(Smaldone, p. 10.)

ヒルファディングは、ゼッサー<sup>3)</sup>の最も promising な学生たちの中にあった。(Smaldone, p. 11.)

ヒルファディングがなぜマルクス主義に傾いたかを、Smaldone は、1. ツヴァイクが叙述するような、当時のウィーンのギムナジウム制度、2. 当時のウィーン、3. ユダヤ社会<sup>4)</sup>、の3つに求める。(p.11-12.)

ヒルファディングは、C・グリュンベルグとE・マッハの影響を受けた。そしてマッハの授業に出た。(p.14.)

ドイツとオーストリアの2つの社民党を比較しよう。後者はヴィクトル・アドラー、前者はベーベルによって作られた。オーストリアの党員は *Arbeiter = Zeitung* の定期購読者であった。ドイツでは、少なくとも1900年代にベルリン地方では、党員証が発行されていた。ドイツに比べ、オーストリア党は急進的であった。

「カフェ・ツェントラール」で、オーストロ・マルクシストたちは討論していた。例えば、パウアーの理論<sup>5)</sup>は、ヒルファディングとともに討論されていただろう。K・レンナー、M・アドラーが加わった。ここでカントが論じられた。

ヒルファディングは、ベーム＝バヴェルク・ゼミナールにもフリーで参加した。

オーストリア党には、レンナー以外はユダヤ人が多い。概して社会民主党にはユダヤ人が多い。ボルシェヴィキもそうだった。彼らのコスモポリタン性による。

---

(3) 『若きヒルファディング』見よ。

(4) この点でいえば、野村真理『ウィーンのユダヤ人』(御茶の水書房 1999年)が、役立つだろう。

(5) パウアーの『民族問題と社会民主主義』御茶の水書房、の経済論部分。

## 8. ドイツで

健康保険医ヒルファディングは、1906年にドイツに行った。彼はウィーンでは、G・マーラーが活躍した同じ時代だった。マルクス経済学では食べられないのだ。彼はSPD党学校教師を半年勤めた。彼の後任は、ローザ・ルクセンブルグであった。その後、『フォルヴェルツ』編集局で生活した。同時にカウツキーの『ノイエ・ツァイト』編集を手伝った。前者では月給が出るが、後者では出ない。この時、友人になったのが、レオン・トロツキーである。

1907年に、ヒルファディングはローザ・ルクセンブルグの急進性と思想的に別れ、カウツキーらは、1910年に中央派と言われるようになった。ヒルファディングは、カウツキー<sup>1)</sup>・ファミリエ(あだ名)に属した。同時にローザらのゼネスト論と対決した。

『金融資本論』には、2つの課題と限界がある。課題1は、20世紀経済学を作ること、課題2は、ベルンシュタイン経済学批判をしたことであり、後者は拙書で証明した。

『金融資本論』の成立について、河野の発見した「評注」は、意義がある。ハプスブルク帝国金融資本成立論と言うべきものが、E・メルツの、主にクレディット・アンシュタルトの分析(März, Eduard: *Österreichische Industrie- und Bankpolitik in der Zeit Franz Josephs I.* Wien 1968.)である。ヒルファディングはオーストリア金融資本も見ていた。ちなみに、『金融資本論』は、流通主義ではない。私の稿、岩波書店の『経済学辞典』で、なぜかそう書かれてしまった。

『金融資本論』の限界は、ヒルファディングの後期諸論文から与えられる。

ヒルファディングは、1936年11月に書く。「[世界]戦争は、帝国主義の古典的政策すなわち金融資本論の政策にさしあたり終止符を打った。」(黒滝書, 211

---

1) カウツキーについて日本の研究は、山本『カウツキーとドイツ社会民主党』。相田慎一『カウツキー研究』昭和堂、相田『言語としての民族』御茶の水書房。

ページ。)その後期主要作品『ドイツ経済の批判によせて』[1938年]で言う。「ドイツは以前に、内的に銀行と産業がおおいに絡み合っていたのだが、それは本質的に後退した。産業は負債者から債権者になっている……。」(『ナチス経済の構造分析』129ページ)大蔵省発行・保証の手形で、産業の銀行依存はなくなった。(同)

『金融資本論』の資本主義観は変わらなかったか? 黒滝は、ヒルファディングの1937年手紙から、彼が1914年以降の資本主義の分析が必要だと言うことを紹介する。黒滝は、ヒルファディングの見解の変化、あるいは再検討の起点を1916年の連続論文『貿易政策の諸問題』に見る。ついで1931年と1937年が転機となったとする。1930年では、ほぼ『金融資本論』の原理で説明していた。こうして、ヒルファディングは『金融資本論』での資本主義観を修正することになる。しかしどの点がかが重要である。

創業利得を銀行が奪う理論は(河西勝『農業資本主義』は、否定する)、もしあったとしてもドイツ・オーストリアの古典金融資本時代である。銀行の産業支配(河西氏は、否定する)は、ヒルファディング自身の発言で限定づけられたと思われる。

ヒルファディング理論は、ただし、国際金融資本(ロックフェラー、モルガン、ロスチャイルド)に資本主義が支配されているかぎり、現在でも正しい。その点ではヒルファディングだけでなくレーニン説もそうなる。

『金融資本論』は、レーニンの『帝国主義』だけでなく、ブハーリンの『帝国主義と世界経済』に直接影響した。

第1次世界戦争が起きた1914年8月に、SPDは戦争公債予算に賛成した。ベーベルは、1913年に死んでいた。Dieter Fricke<sup>1a)</sup>の論によると、この大問題は、すべてベーベルの路線に問題があったという。さて、ベーベルがもし生きていたらどうしたか。私は、棄権したと推測する。彼の死後、SPDでは、フー

1a) D. Fricke 「ドイツ労働運動におけるアウグスト・ベーベルの役割」1981. 4. 7, 於: 北海道大学。

ゴー・ハーゼ（左派）とF・エーベルト（右派）の共同党首制となった。

戦争原因論は、私は、『ハプスブルク歴史物語』で Erzherzog Kronprinz Franz Ferdinand の暗殺情景を叙述した。J.A.シュンペーターは、『帝国主義と社会階級』で、封建勢力を原因とした。ヒルファディング & レーニンも、資本主義的帝国主義を原因とした。A.J.P.テイラーは、『第1次大戦』で、軍隊自体の重みを原因とした。J.A.ホブズンは、『帝国主義』で、投資金融業者とした。広瀬 隆は、『赤い楯』で、死の商人=兵器業者、ザハロフ、概してロスチャイルド家を原因とした。F・フィッシャー（ボン大学）はドイツ原因論を主張し、ドイツの保守派歴史家はそれに反対<sup>2)</sup>した。

戦争反対問題の状況はどうか。ドイツで戒厳令が出された。戦争に反対すれば犯罪となった。軍隊・警察がまず SPD 指導者を威嚇していた。SPD は大衆に追従した。戦争に反対すれば、党と組合の成果をすべて失い、指導者は監獄へ行くことになる。そのジレンマがあった。K. リープクネヒトでさえ、党の統一のため、初めは黙るのだった。SPD が合法政党だったから、戦争に反対できなかった。一方、ボルシェヴィキは、事実上の非合法政党だったから、戦争反対は容易だった。SPD は数日の間で、反対から賛成へ変わった。SPD の平和主義は、心だけであって、行動はできなかった。

徴兵問題が起きた。戦争が起きて、徴兵にとられるか、反対するかの問題についてはこうである。SPD の人々は徴兵にとられた。レーニンも、人が徴兵にとられることは反対していない。戦場で銃を敵でなく反対に味方に向けよと、無理なことではあるが、そう言う。当時、イギリスのクエーカー教徒の良心的兵役拒否を除けば、徴兵に反対するという思想はなかった。

ヒルファディングは、初め1年ベルリンにいたが、Landsturmarzt となり、ウィーンで1年、そしてチロルで2年勤めるのであった。

---

2) ナチズム論でも同じである。例。フェスト『ヒトラー』上下、河出書房新社。第2次大戦は、ドイツが起こした。ヒトラーはドイツ人的だった。

戦争を革命に転化すべく、レーニンが戦術(=帝国主義戦争の内乱への転化、自国の軍事的敗北理論)を出した。これには限界があった。西欧民主主義的市民社会、ブルジョアジー、の問題である。西と東は違っていた。オランダ、イギリス、フランスのブルジョア革命がすでにあつた。ドイツでも三階級だが選挙制度があつた。1907年にオーストリアは普通選挙があつた。これらヨーロッパには、ある種の法治主義があつた。ブルジョアジーが法律を守ろうとした。人々に遵法精神があつた。一方、ロシアにはそれが少なく、暴力主義でやってゆけた。それに加え、政治家レーニンには、ナロードニキ性があつた。

他方、1917年2月のロシア革命で、ロシアが離脱したので、「世界の民主主義のために戦う」協商諸国の喉の骨がとれた。

半絶対主義体制の経済が相対的に強いドイツと、弱いロシアの差があつた。ロシアは倒れた。1917年の、ドイツでのUSPDの成立とロシアの2月革命と10月の赤い革命は、同じ流れであつた。

レーニンは、『帝国主義論』(1917年)、つまり“マルクス主義の新約聖書”を出版した。これは、第2次大戦後にはあてはまらない。だが、1. 短期的には正しい。一方で、それが批判したカウツキーの帝国主義論は長期的に正しい。レーニンの説は、2. 経済学では正しいとしても、政治論では間違いである。3. その内容の7割は、ヒルファディングの受けうりであつた。レーニンは、ヒルファディングの政治的立場次第で、ヒルファディング評価を変えている。レーニンは、執筆時、ロシア語版『金融資本論』を持っていた。パウアーのロシア語版も持っていたと思える。4. レーニンの書の課題は、カウツキー批判であつた。もっともカウツキー・レーニン論争なるものは無かつた。5. レーニンのホブスン利用は、一面的である。

ロシアの赤い革命は、当初はブルジョア的であつた。革命時の2つの布告もそうだった。ロシア革命への参加者は、フランス革命を考えていた。トロツキーの役割は大きかつた。レーニンではなく、トロツキーが具体的指導をした。これはボルシェヴィキ革命でなく、ソヴェト革命だった。ましてスターリンではない。ジョン・リードのルポルタージュではスターリンは出てこない。革命



を、2つの政党、ボルシェヴィキと左派エス・エルが起こした。西側参戦諸国のこの赤い革命への恐怖が、第一次大戦の休戦への原因となった。

レーニンの失敗は、憲政議会解散であった。統一戦線戦術でも失敗した。というより、その思想を真に持っていなかった。ロシアの対ドイツ戦問題で、左派エス・エルが閣外脱退し、一党制になった。

ヒルファディングとカウツキーは、ロシア暴力革命を批判した。これはヨーロッパ人としては当然であった。

それに、ヒルファディングは、社会主義実現に、内乱ほど重大な障害はない、とする<sup>3)</sup>。ヒルファディングは経済破滅なしの革命を望んだ。

ドイツ側＝同盟諸国の敗戦は、半絶対主義・君主制の経済的弱さ、世界市場を絞められたことから起きた。ドイツはその点で弱かった。そのうちでもオーストリア・ハプスブルクの方が、ドイツより弱かった。後者には民族問題も加わった。

ドイツ革命(1918年)は、USPDが起こした。ロシアとともにブルジョア革命的であった。革命の前と後の問題として、ドイツの過去との連続と非連続の問題がある。ドイツでは官僚・軍隊・ユンカーは革命の前と後とで連続していた。過去との非連続なものは、議会、憲法、労働者の権利、であった。これが後に反動(農民・地主・中小そして大資本の)を呼ぶのであった。それをナチズムにすくわれた。

これに関係して、ドイツ革命にはエーベルト問題がある。SPD党首エーベルトは秩序を重んじた。またSPDは革命に弱腰だった。

ドイツやオーストリアでは、プロレタリアートが帝制を倒した。だがこれは社会主義まで行かないのであった。

ヒルファディングは後に、ドイツ革命を、ドイツ労働階級が権力を引き受ける準備が物質的にも思想的にもなかった時に崩壊に会った、とする<sup>4)</sup>。

---

3) 『現代資本主義論』(新評論) p.96.

4) 同 p.34.

## 9. 再びベルリンで

ヒルファディングの私生活では、マルガレーテと離婚し、ローゼと再婚した。マルガレーテとの子息は2人であり、カールとベーターであり、2人はマルガレーテと共にウィーンで生活した。ヒルファディングはローゼとベルリンで生活した。ローゼの娘の名は Elisabeth である。ローゼの連れ子である。彼女についてよく呼ばれる Maus は、娘の意味である。

ヒルファディングの USPD 時代の初めの任務は、中央機関紙『フライハイト』の編集長である。彼はフーゴー・ハーゼ暗殺後に指導者となり、また最後の指導者となった。

ヒルファディングはハレ大会でジノヴィエフと論戦した。USPD の分裂後、一部は SPD と再統一した。コミンテルンはあわただしく成立した。規約作成の遅さからもわかる。いまから見て失敗だった。USPD を分裂させる方針もヒドイことだった。ヒルファディングはこれを労働者階級の内部闘争とみる<sup>5)</sup>。

SPD でのヒルファディングは、蔵相として (1923年8月から9月, 1928年6月から1929年12月), 国会議員として (USPD 時代を除く, 1924年から1933年) 勤めた。政治理論的学術的活躍としては、理論雑誌『ゲゼルシャフト』の編集長となった。またレンテンマルクの解決を準備した。党内では、1922年に、書記局員、綱領委員となった。1924年に、ベルリン党大会で主報告をした。1924年に、書記局員である。1925年に、カウツキーとともに綱領の執筆をした。同年、ハイデルベルグ党大会で綱領の報告をした。また書記局員だった。1927年に、キール党大会で綱領報告をした。「組織された資本主義論」として高名なそれである。この理論は第2大戦後、有力になった。1929年、マグデブルグ党大会で主報告をした。1931年、ライプチヒ党大会で主報告をした。この年、書記局員だった。

ヒルファディングは、SPD では、大政治家としてでなく、大理論家として見られていた。

---

5) 同 p.36.

ヒルファディングは、戦中戦後、資本のとほうもない強化がされ、それが組織資本主義であること、ドイツ資本主義の内部強化・集中は、戦争と革命の結果である、とする<sup>6)</sup>。

ヒルファディングは、賃金を政治賃金とみた。つまり賃金は政治によって作用される、と。

ヒルファディングは、戦後の社会化にかんして活躍する。彼の社会化論の本筋はこうである。社会化には、i 生産上昇が必要である<sup>7)</sup>。——労働意欲が高まる。ii 社会化にはテクノクラートを入れる必要<sup>8)</sup>がある。iii 社会化は、国有化・官僚化ではない<sup>9)</sup>。iv その管理部は複数<sup>10)</sup>あるべきで、競合、生産管理がされる必要がある。社会化は、v 基幹産業、集中度の高い産業、エネルギー産業から始まるべきである。vi 社会化は、三者構成、つまり生産者・消費者・公共代表によって行い、労働者の管理能力を高める、というものであった。

彼の1929年大恐慌論は、大恐慌が、戦争清算恐慌であり、過剰生産恐慌であり、農業恐慌と工業恐慌が一致したのだ、というものである。

1935年は、恐慌最低期で、国家権力がとほうもなく強化したとみる。これをくわしく見ると、戦争の結果、1. 農業・原料変革がおきた、2. 技術・経営の合理化、失業がおきた、3. 世界的工業化が進んだ、そしてアメリカの欧州投資、これらが過剰生産 → 大恐慌 → 国家介入と進んだ、とする<sup>11)</sup>。

ヒルファディングの議論と近年の国家独占資本主義論との対比を見ると、なるほど、ヒルファディングはそれに類似している。だから国家独占資本主義論の先駆とも言える。しかしそれよりも国家・政治の役割の強調が強い。

ヒルファディングの経済思想は、もちろんケインズ的ではない。インフレーション

---

6) 同 p.39.

7) 同 p.46.

8) 同 p.47.

9) 同 p.48.

10) 同 p.50.

11) 「1935年の経済」(同)

ションを望まなかったから、もちろんである。ニューディール評価も、インフレーションになるからという理由で、ヒルファディングは高く評価していない。これは従来、ヒルファディングの欠点とされてきた。しかし、社会民主主義者として、資本主義の延命策を好んでとりあげるわけにはゆかないと考えれば、その意味では当然であった。また、真に恐慌を克服したのは再軍備であり戦争であるという観点から見れば、ケインズ、ニューディール政策が、全く有効だったわけではないこと、も注目しておくべきであろう。

R. ヒルファディング『現代資本主義論』（新評論）では、前出の諸点以外では、彼の次の指摘が興味深い。

金融資本は、組織された資本主義が始まる時代だ。国家と経済が結び付きの変化は、戦争がきっかけである。古典的帝国主義は戦争（＝第1次大戦）でおわった。大恐慌は戦争の根本的清算である。（p.124）野党・与党のときの政策は違うべきだ。

古典的帝国主義とファシズムとの違いは、経済でなく政治で、戦争で、ある。

## 10. ナチズムとの関連で

ドイツでは独占的資本主義になったので、自由は無意味なものとなった。

ワイマール共和国時代に、フランスがルール地方を占領した。その後1930年に、ラインラントを撤退した。

ナチ党員は、1927年に4万人、1928年に6万人だった。1929年にナチ議員は106名となった。ワイマール時代に社会民主党（以下、社と略す）と共産党（以下、共と略す）が対立した。社共が統一していればよかった、とスウィージーの紹介する手紙は言うが、ありえなかった。もちろんその指摘は正しいが。共産党の増大で、社会党がしりごみをした。軍部はヒトラーを過小評価し、一方、重工業が彼を支持した。

ワイマール共和国崩壊の原因はこうだった。ヴェルサイユ条約が荷重だった。世界恐慌が原因だった。ドイツ国制上の欠陥（大統領制）であって、政党が民

民主主義を担当できない、政府選出ができない、状況だった。共・社両党が、ナチズム問題を認識せず、戦略・戦術を誤った。右派、反民主主義、反共和、帝制復活が成長した。官僚と軍隊が、民主主義に理解をもたなかった。結局、民主主義に慣れないドイツ国民だったから、官僚支配になれてしまった。上からの支配が、ドイツ人の心情に合致した。軍隊と官僚がナチを援助した。国家は右派に甘かった。国民はナチの悪魔的性質を見抜けなかった。ナチズムはドイツの伝統と無縁ではなかった。

ナチほど声高に、市民の自由や民主的平等の保護を主張した野党はなかった。議会主義の実際は、理論と一致しなくなった。議会制度は非能率的で、腐敗している、だから強力な政府をもて、そして全権力を大統領へ与えよ、また熟慮よりも決断を、とナチは望んだ。ナチズムによって官僚イデオロギーが利益を受けた。ナチスは軍を批判しなかった。

### ドイツの年誌

1933・1・30 ヒトラー内閣（連立）が成立し、首相はヒトラー、副首相がパーペンとなった。パーペンは、愚かにも、内閣の指導権を握れると思った。経済&食料相がフーゲンベルグ、労相はゼルテ、国防相はブロンベルグで、彼はヒトラーの心酔者であった。内相はフリック（ナチ）である。プロイセン内相はゲーリングになった。

2・27 に国会炎上事件があり、3・5 に総選挙がなされた。3・17 ライヒスバンク総裁にシャハトが、新政府ではダレが農相に、なった。

ヒルファディングは、3・21 に亡命した。まずデンマークへ、そしてルツェルン（4月）へ、そしてチューリヒに逃れた。

3・24 全権委任法が通った。共産党36万人が弾圧され、社会民主党の集会・出版が禁止された。社会民主党は、4月に、党首脳がザールブリュッケンへ移った。5月にプラハへ逃れ、ゾパーデ（Sopade）・ビューローを作った。

5・2 労働組合が禁止され、ドイツ労働戦線（ナチの労働組合）が5月に作られた。弾圧が、共、社、ブルジョア政党に与えられた。6・2 ファシズム・

ドイツでは均一化 (Gleichschaltung) がなされ、国家とナチ党の画一化がされた。1933・10・17 ドイツは国連を脱退し、1933・11・12 国連脱退人民投票が行なわれた。

6・22, SPD が禁止され、他のブルジョア政党は圧迫され、ナチに吸収されました。7・14, ナチ一党制が確立した。

翌1934年に、SPD 声明 (プラハ) が出たが、反対派と協調派に分かれた。亡命中の SPD は、やや後悔して、同党が悲劇的な過ちをおかしたことを認めた。「ドイツの労働階級運動が戦時 (第1次大戦) 中に方向を誤って、古い国家機構をほとんど不変のまま接收したのは重大な歴史的誤りであった」と。

1934・6・30-7・2 血の粛清により、レーム以下が虐殺され、SA とレームの考える第2革命=独自の社会主義革命は、ならなかった。

1934・8・19 ヒトラーは、統領兼首相になり、人民投票がなされた。王朝的権威国家が作られた。

ナチズム経済の下、1933年2月~1937年春、失業者の数は600万から100万たらずに減少した。1937年に、失業者がほぼなくなった。ナチは軍需工業を發展させたのである。経済を安定させることで、国民にナチ支持にさせ、そのかわり政治権利をすべて奪った。労働法では、資本家は経営内の指導者となり、独裁権をもった。

戦争経済 (Kriegswirtschaft) なる言葉が経済史学で使われた。防衛経済 (Rüstungswirtschaft) は、当時、事態をヴェールに包む言葉だった

戦争中にフォルクスワーゲン (Volkswagen) は1000台作られた。1933-38年に、離村が統計上新記録となった。その後の話だが、ドイツ占領地からドイツへ、労働力が1944年末に479万人やってきた。

ナチはユダヤ人と反政府派への襲撃を行なった。警察予備隊に SS と SA 4万人を入れ、テロが合理的になった。

1935・9月、ナチはニュルンベルグ法を通し、ユダヤ人抑圧を合法化した。1936・3・7 ドイツはラインラントに進駐した。これはヒトラーに自信をつけた。1936-39年は、ヒトラーの4か年計画の年であり、1937年に経済力が頂点

になり、彼は領土の必要性を説いた。

1937・11・5 ヒトラー演説がなされ、ホスバッハ覚書によると、ヒトラーは戦争の開始を決意した。

ドイツはポーランドと不可侵条約を結んだ。「水晶の夜」<sup>11a)</sup>からユダヤ人迫害がひどくなった。迫害の指導者ヒムラーの片腕がハイドリヒであった。

オーストリアでは、ドルフス⇒シュシュニグ⇒インクヴァルトと首相が代わった。

国防軍指導者ブロンベルグ、フリッチェが、1938年1月に、あいついで解任された。ヒトラーはこうして国防軍を掌握し、軍部の影響を除いたのである。

ヒトラーは1938年にオーストリア併合をした。その後、ズデーテン併合をし、ミュンヘン会談で成功した後、1939年にチェコ侵入をした。これは他民族抑圧であった。1939年3月チェコ全土を占領した。

フンクが、1937-45年、経済相で、1939年にドイツ国立銀行総裁になった。

1939年、テュッセンは、スイスに逃亡し、1941年にKZ（強制収容所）にぶちこまれる。

ナチ・ドイツに居残った芸術家は、フルトヴェングラー、R. シュトラウス（一時ドイツ音楽会議議長）、ヴァルター・ギーゼキング、ハウプトマン、ハイデガーであり、アインシュタインは、すでに1933年に亡命した。

1940年6月、「戦争はロシアでも」とヒトラーは愛人エヴァに語っている。1940年9月28日に、「真の戦争だ、敵はソヴィエトだ」とエヴァに言った。

イタリアについてヒルファディングは書いている。「ムソリーニは、彼の代議士や彼の新聞によって、Dschibuti（ジブチ）、Tunis、コルシカへの要求を出させようとするだけでもはや甘んじていない。彼はもっと一歩進み出している。彼とラヴァルの間で1935年1月に結んだ協定（Vertrag）を廃止したと声明したのである。この協定で、イタリアは、アフリカにおけるフランスとイ

---

11a) 拙書『ハプスブルク・オーストリア・ウィーン』成文社、61～62ページ。

タリアの植民地の境界の拡張的調整を認められた。……」

1939・3月 英は、ポーランドに援助保障を宣言した。ヒトラーは、しかしポーランドを狙った。

1939・5・7 独伊鉄鋼条約がなった。これでイタリアが戦争を強いられた。

1939 ドイツで外国放送を聞くことが禁止された。スペイン市民戦争が終わった。

8・23 独ソ不可侵条約が結ばれ、9・1 ポーランド攻撃がされた。9・27 ポーランドが滅亡し、それを独ソで分割した。

ヒトラーはイギリスが中立でいるだろうと信じたはずだとされる<sup>12)</sup>。ラジオでは戦前、ポーランド回廊をとるだけだと、放送していた。戦線でレニ・リーフェンシュタールは、ヒトラーの演説を聞いた。「決して私は、フランスやイギリスと戦争をする意図はなかった。我々は西には戦争目的がない」<sup>13)</sup>と。これはしかし偽りである。人々はだまされた。

ドイツはガリチアを征服した。石油が目的だった。

1940年 Trotzki が暗殺された。フロイトがロンドンで客死した。亡命中死んだのは、ヨーセフ・ロート、シュテファン・ツヴァイク、ロベルト・ムジール、ヴェルフエル、マックス・ラインハルトらであった。

ドイツは、1940・4・9 デンマークを攻撃し、その後、占領した。5・15 オランダが降伏し、5・28 ベルギーが降伏し、6・22 フランスが降伏した。フランスでは、ヴィシー政権ができる。<sup>13a)</sup>

6・10 イタリアはフランスに宣戦し、ドイツは10月 ルーマニアに進駐した。

12) Leni Riefenstahl, *Memoiren*. München und Hamburg 1987 Albrecht Knaus Verlag, 927 S. S.349.

13) Op. cit., S. 353.

13a) アンリ・ミシェル 『ヴィシー政権』 白水社：渡辺和行 『十千占領下フランス』 講談社，1994年。



### ヒルファディングの見解

ヒルファディングの1933年以降、死ぬまでの彼の政治経済学を見る。

ドイツ・ナチズムが1933年から1945年まで続いたうち、ヒルファディングは1941年まで生きたが、実際は1940年までが彼の活躍期である。

ナチズムの区分は、たとえばシーダーによれば、経済政策的には3つの時期に分かれる。

1. 33年-37・11月 シャハト時代、重要ポストが保守右派で、強い国防力を作ろうとする。インフレを起こさなかった。
2. それから42・2月まで ゲーリング時代、個人消費を犠牲にし、財政赤字を無視し、軍事化した。
3. その後から、45・4月まで シュペーア時代、中央計画、企業家の自己責任にまかした。統制経済ではない。軍需生産の最盛期。

ヒルファディングの生活は、これに従えば、第1期シャハト期と、第2期ゲーリングのほとんど、にあたる。ただし、ゲーリング期は、もう少し早く、一九三七年夏からと見た方がよい。さてシャハト期ではインフレーションを起こさず、とされるが、正しいだろうか。ヒルファディングの分析によれば、インフレーションが進んでいる。

1933年のヒトラー権力掌握で、ヒルファディングは根本的に政治思想の反省をした。その産物は「ブラハ綱領」である。

後期ヒルファディングの最もよい作品は、「歴史的問題」と『ドイツ経済の批判によせて』であろう。後者の作品は、上でいうシャハト期をほとんど対象としている。

そこでは、こう述べられる。

ドイツにおける銀行と産業の絡み合いの、つまり金融資本の本質的後退が起きた<sup>14)</sup>。インフレを妨げる手段として強制経済へ転化された<sup>15)</sup>。全体国家が

14) 『ヒルファディング ナチス経済の構造分析』新評論 129p.

15) 同 p.120.

不可避である<sup>16)</sup>。ソヴェト・ロシアとナチス体制の相違が縮小<sup>17)</sup>した。

ナチスの軍需は、準備ができていなかった、と言われる。例えば、オーヴァリーは、1939年はまだ準備不足だった、と。テイラー説によると、反対にポーランド戦争（1939年）で、大体軍事的準備ができた、と言う。

D. アイヒホルツは、（第2巻）で、1939年にドイツは完全雇用になった、と言う。もちろんこの時はポーランド戦争であり、戦争の時は完全雇用になったであろう。

ヒルファディングのファシズム論を見ておこう。

農民と中間層がおののき、そして失業者もそうだった、というのがファシズム成立の根本原因である。

第1期（＝第一次大戦後）に、次の図式が描ける。労働者の強化⇒大資本・大農業がそれに抵抗し、中間層と同盟、⇒労働者に対立する。こういう因果関係である。

第2期（＝大恐慌以後）では、大恐慌により都市・農村の中間層が大資本・労働者に対抗する、そして大資本・大農業がゆらぐ。全国民がナチへ向い、労働者に対立する。このとき、社・共が2つに分裂していた。共は、社に敵対していた。すべてがナチへ賛成し、強制組織へ入れられた。人民が非政治化され、多くの人がナチを支持した。だからナチは、広い大衆的基盤をもった。

この時代は、国家権力が自立化した<sup>18)</sup>。それは、ドイツ（全体主義国家）とロシア（全体国家）で、極端になった。この独裁国家政治は、古典帝国主義とは関係が無い。表現を変えれば、古典的帝国主義とファシズムとの違いは、経済でなく政治で、あるいは戦争で決定される、というものである。

ファシズム論はまだ他の系論をたどることができる。

ヒルファディングは、ドイツの（Autarchie）経済を批判する。自給自足は、

---

16) 同 p.142.

17) 同 p.173-4.

18) 『ヒルファディング 現代資本主義論』179ページ。

しかしイデオロギー的戦争開始の口実であって、第3帝国で論じつくされた。これを真面目に受けとったのは、ヒルファディングの不十分さではないか。

ヒルファディングの歴史論は、こうである。

1) 暴力が経済を決めるのだ。1914年以降その段階になった。国家権力と社会の関係が変化した<sup>19)</sup>。全体的絶対主義が登場した。

ヒルファディングの作「歴史的問題」は、1. 史的唯物論の修正あるいは改造である。第1次大戦からマルクスの理論は修正・改造すべきだとする。政治権力=暴力が歴史を決めるとした。ヒルファディングはナチズムを見ていた。『金融資本論』での戦争原因論を捨てたと、表現上は見られる。ただしこの書は第1次大戦直前の時代を対象にしている。

ヒルファディングは、1914年(=第1次大戦開始)以来の社会を、マルクスの史的唯物論では解釈できないとする。上部構造と下部構造の区分も疑問である、とする。国家権力の自立化、力・暴力の役割を組み込むべきだ、と主張する。本当にそう見てよいだろうか。ただしと思える2つの例は、第1. ヒトラーの独ソ戦である。ドイツのヨーロッパ支配まではドイツ総資本は望んだ、しかしその後のソ連攻撃はドイツ総資本は望まなかった。しかしヒトラーは敢行した。第2の例は、ソ連におけるスターリン支配である。

2) だから、マルクス史観の吟味をしなければならない。国家権力は独立のファクターである。そして重要なのは、意志決定の問題である。特に、社会集団の利害・理念メカニズムを究明する必要がある。

マルクスの歴史論(=1つの研究方法)を発展させるには、社会集団の利害、つまり、1. 社会集団の利害状況、2. 利害が諸階層へ及ぼす心理作用を見る必要がある。物質利害が意識に、それが理念になり、行動するのだ、と。階級だけでなく社会集団区分を、本源的収入だけでなく派生的収入を、階級意識と階級利害だけでなく、特殊利害意識が一般的階級意識になることを見るべきだ、

19) 「歴史的問題」『ヒルファディング 現代資本主義論』192-3ページ。

と。階級ではなくて社会集団として取り扱うべきだ，社会集団の利益，階層利益のイデオロギーへの転化，利害状況から階級意識への転化へのメカニズムの解明が必要だ<sup>20)</sup>。以上，ファディングは主張する。

ヒルファディングと社会民主党の「失敗」？は，1. ナチスを防げられなかった。少なくとも統一戦線では失敗した。2. 大恐慌を解決できなかった。3. 均衡予算を守った。非ケインズ的だった。ヴォイチンスキーに反対した，である。

しかし1，2は仕方が無いかもしれない。2では，ケインズでうまくゆくか。

ナチスに対するヒルファディングの，亡命時代の主要な作は，主著『ドイツ経済批判』である。ナチズムの自給自足経済＝生存圏経済・軍需経済・インフレ経済，への批判である。『ノイエル・フォルヴェルツ』諸論文のエッセンスをまとめたものとみることできる。

ヒルファディングは，自ら，第1次大戦の意義を過小評価したのではないかと思った。そして現在の恐慌，つまり大恐慌を戦争＝第1次大戦の清算過程と見た。

ヒルファディングの執筆したプラハ綱領（1934年）の問題では，統一して，あらゆる戦術で倒せ，と。そして西側への期待が述べられる。

ヒルファディングは，これ以外に，1939年のSPD幹部会の「呼びかけ」を執筆した。

ヒルファディングは，『ノイエル・フォルヴェルツ』に，毎週論説をのせた。その他，雑誌を編集した。彼は，SPD，亡命SPDの，第一級の理論家だった。

ソ連，スターリン主義に対して，はこうだ。スターリンは組織原則をねじまげ，犯罪的指導をした。これらは，「モスクワの独裁に抗して」「ジノヴィエフ批判」（USPD時代），「ウォロル批判」（亡命時代）で論じられた。独裁批判

---

20) 「歴史的問題」では，B. カウツキーが第1見出しを，標題にした。遺稿のための準備ノートあり，と黒滝。

—— スターリン主義もナチス国家も —— である。

ヒルファディングのウォロル批判では、当時のファシズム国家、そしてスターリン国家を対象とした、ヒルファディングの全体国家論である。ヒルファディングは1936年以来変わってきて、1938年には「国家経済」概念を持った(黒滝)。

ヒルファディングは、国家権力の自立を確認する。そしてソ連は官僚支配であるよりも、スターリンの独裁だとする。ヒルファディングは、1936年1月にはまだ、そして1939年にも、ロシアを社会主義として見ていた(黒滝)。だが急に新しい見地にたつ。ソ連が資本主義でもなく社会主義でもないと規定する<sup>21)</sup>。

ヒルファディングは、Parisで、「1941年2月10日、La Santé 監獄で服毒し、2月11日朝、Fresnes 監獄の特別病舎に移され、おそらく2月11日中に最終的な死に至り、2月13日に遺体は……検死を受けた。そして der Evangelische Gemeidefriedhof……に埋葬された。」(黒滝、264ページ)

### 彼の死後の事態

ヒルファディング死後の事態をかいつまんで記そう。

全体戦争 (Totalkrieg) という言葉は、WW1に初めてルーデンドルフが使い、前線と銃後の区別なしの意味である。これは第3帝国で論じつくされた。

1941・3月にドイツはブルガリアに進駐し、4月ユーゴを征服し、ギリシャを占領した。対英戦争を空・海で行ない、アフリカ戦が起きた。6・22ドイツはソ連を攻撃した。

1942年、43の企業家が、戦争の終わるのを予想していた。

1942年4月22日、ヒトラーは愛人エヴァに語った。「ロシアの大草原に巨大な建造物“東門”を築きあげ、そこを起点に西から東まで17のアウトバーンを作り、ウクライナの小麦やコーカサスの油をヨーロッパに運ぶ」と<sup>22)</sup>。

21) P. M. スウィージーが『革命後の社会』(TBSブリタニカ)で研究した結論を、ヒルファディングはもう数十年前に出しているわけである。

22) パートレット『エヴァ・ブラウンの日記』学研文庫 2002年。

1942・夏 ドイツはソ連を再攻撃し、11月 米は、北アフリカに上陸した。

1943・1月 ドイツはスターリングラードで敗戦し、5月 米が、北アフリカを占領し、6月 米は、シシリーに上陸した。9月 イタリアが、降伏した。

1944・6月 ソ連が反撃した。6・6 米・英がノルマンディ上陸をはたした。

この間ドイツでは、抵抗運動が起きた。保守派＝軍部の抵抗が、バック参謀総長らを中心に起きた。バックは1938・8・31 自ら退職しており、ズデーテン併合に反対した。後任ハルデーも抵抗した。1942年以来、高級将校の抵抗が始まった。モスクワの自由ドイツ委員会でも起きた。

1944・7・20 ヒトラー暗殺事件がシュタウフエンベルグ伯らにより起こされたが、反乱は未遂だった。軍部にはだんだん伝統的軍人がいなくなった。

ワルシャワ蜂起が8月にあり、ドイツのアフリカ戦線は負けた。

1945・4・30 ヒトラーは自殺し、ドイツを焦土にせよと、命じた。5・7 ドイツは降伏した。

ヒルファディングの希望は実現した。

## 11. 結論的評注

ヒルファディングは、20世紀初頭から40年間、政治経済学の分野で活躍した。20世紀前半は激変の時代であって、その中でヒルファディングは、初めマルクスに従いながら創造的な研究をし、しかしマルクスを超える視点を見出した。そして新しい現実をユニークに分析した<sup>23)</sup>。とりわけ、ナチズムとソ連体制を冷静に観察をした。

---

23) 本稿のトルソーを、一度、北海道経済学史研究会 1996年1月27日：於 札幌大学、で報告した。